

こんでの撮影だったこと、スタッフのチームワークと監督のコントロールが見事だったことが察せられる証言だ(ちなみにルイス・ブラックは地元紙『オースティン・クロニクル』の共同創刊者にして編集者。リンクレイターは、自主上映企画の広告を同紙に何度か掲載してもらっており、ふたりは1985年以降の知り合いであった)。

題名となっている「スラッカー」は、19世紀ごろから「義務を果たさない怠け者」の意で使われていた言葉だ。第一次世界大戦中に「兵役忌避者」の意味で頻繁にメディアに登場したものの、概してそれほど一般的に使われる言葉ではなかったのが、この映画のヒットによって日常の語彙に入ることとなったと言われている。怠惰で働かず、無目的で野心がなく、政治に無関心な者を指す言葉として通常用いられる。

だが本作に登場するスラッカーたちは、確かに職には就いていないけれど、怠惰で野心がないどころか、すでに幾人もの評者に指摘されているとおり、なんと情熱的なことだろう。時に極端な方向に振れるとはいえ、関心のあることには一直線に突き進み、言葉を尽くして饒舌にしゃべり続ける。リンクレイターはこう説明する。「社会に置いていかれているかのように見えるかもしれないが、むしろ彼らは社会よりも一歩進んでいる。社会や、社会のヒエラルキーに拒絶されるより前に、みずからそれらを拒絶している。(……)自分たちが目指しているものと無関係な活動で、時間を無駄にはしない人々だ」。だからスラッカーであることは、それ自体反抗の身ぶりである——もちろん、彼らの一部が口にする反体制的な言葉は、ざっくり言ってしまえば(父ブッシュも含めた)レーガンの保守と、それを支える経済的エスタブリッシュメントへの反発から生じており、9・11はおろかまだ湾岸戦争も始まっていない時代に生きている彼

らの政治意識は、現代から見るとずいぶんシンプルに見えるかもしれないが。

大学街であるオースティンに暮らすこのスラッカーたちの多くは、おそらく高学歴で、相当の教養を有している。映画のなかには、ドストエフスキの『賭博者』、<sup>★4</sup>ジョイスの『ユリシーズ』、<sup>★5</sup>ニーチェの『力への意志』などのテキストが引用される。となれば一方で、反抗の身ぶりはしよせんインテリのスノッブなお遊びではないか、口先だけで何の実効性もないのではないかという見方も出てくるだろう。実際、この映画全体は何ら闘争的ではなく、喜劇的な効果をねらったものだ。リンクレイターほどの登場人物にも深入りせず、ただ彼らのあり方を楽しみながら提示している。

しかし映画のなかに何度か、「行動」をうながす人物が登場することにも目を留めておきたい。ここで、「スペイン内戦に参加した」と言い出す老アナキストの挿話から——台詞でも一瞬言及されるが——ヘミングウェイの名を想起するのは意義のあることだろう。1920年代のパリのカフェで、ヘミングウェイが懇意にした故郷喪失者たちは、『日はまた昇る』に読まれるとおり、まさにスラッカーと呼ばれるべき人々だった。爆発への力を貯めこんだスラッカーが、ヘミングウェイのごとく突然行動を起こして義勇兵になったり、偉大な創作を成し遂げたりというのはありうることだ。この映画のスラッカーたちの多くも、いまはまだ雌伏しているだけかもしれないが、事実リンクレイター自身が、そのような期間を長く過ごしていたに違いないのだった。

そうしたリンクレイターの(当時は現在進行形だった)スラッカー体験を反映しているのか、この映画には、創作活動に没頭する者がたくさん登場する(逆説的に「創作し

ない」ためには努力が必要だと説く者もいる)。彼らは音楽をやり、執筆をし、絵画を描き、写真を撮る。一方で、創作に使う器具が、高いところから投げ捨てられるシーンもある。それも2度。本作には、共鳴しあっているのではないかと気になる細部がいくつかある。母親を車ではねた息子が手に取りかけた録音機械と、早朝の街を散歩する老人が肩から掛けたそれとのあいだには、呼応関係を認めるべきか? テキサス大学オースティン校の大学院生が起こしたテキサスタワー乱射事件(1966)の結果SWATが誕生したこと、ビデオ画面に登場する史学科の大学院生がSWATに殺されることとのあいだには? その大学院生が、<sup>★3</sup>レーガン狙撃未遂事件(1981)の犯人ジョン・ヒンクリーに似ていると評されることと、<sup>★3</sup>マッキンリー暗殺(1901)とのあいだには? バスローブ男の「自然は嫌いだ」という発言と、エピソード部分が展開される場とのあいだには?

内容から離れて形式面を見ると、この映画は、リンクレイターのいわゆる「青春映画」の諸作品よりも、むしろ「<sup>★10</sup>ピフォア」シリーズに近い。というのも、「スラッカー」と「ピフォア」シリーズはどちらも、哲学的な内容を含む会話をシームレスに続けながら、地理的に移動していく映画だからだ。一方、「時間」を重要なテーマに据えることが多いと言われるリンクレイターにふさわしく、『スラッカー』は、24時間のあいだに起こる出来事を語っているけれど、タイムリミットがプロット上の重要な仕掛けになっている「ピフォア」シリーズとは違い、こちらでは時間経過のスリルではなく、映画の進行とともにオースティンの街がどんどんと広がっていくような感覚のほうが強く印象に残る。この感覚を支えるのは台詞のリズムと、控えめながらも高度な達成をしているカメラワークであり、映画ならではの快楽を、それらはわれわれに約束する。



★5

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ 1844/10/15  
プロイセン王国生まれ  
代表作『反時代的考察』(1876)、『ツアラトゥストラはかく語りき』(1885)、『力への意志』(1901)

★6

アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ 1899/7/21  
アメリカ/イリノイ州生まれ  
代表作『日はまた昇る』(1926)、『武器よさらば』(1929)、『老人と海』(1952)

★7

テキサスタワー乱射事件 1966年8月1日にアメリカ合衆国のテキサス大学オースティン校で発生した銃乱射事件。

★8

レーガン大統領暗殺未遂事件 1981年3月30日に、ワシントンD.C.でアメリカのロナルド・レーガン大統領が銃撃された事件。

★9

マッキンリー大統領暗殺事件 1901年9月6日に、ニューヨーク州バッファローのテンブル・オブ・ミュージックでウイリアム・マッキンリー大統領が銃撃され、後に死亡した事件。

★10

『ピフォア・サンライズ 恋人までの距離』  
監督:リチャード・リンクレイター  
脚本:リチャード・リンクレイター、キム・クリサン  
撮影:リー・ダニエル  
音楽:フレッド・フリリス  
キャスト:イーサン・ホーク、ジュリー・デルビー  
1995/105分/アメリカ、オーストリア、スイス  
『ピフォア・サンセット』  
監督:リチャード・リンクレイター  
脚本:リチャード・リンクレイター、イーサン・ホーク、ジュリー・デルビー  
撮影:リー・ダニエル  
キャスト:イーサン・ホーク、ジュリー・デルビー  
2013/109分/アメリカ

篠儀直子(しのぎ・なおこ)

翻訳者。  
単独訳書に『フレッド・アステア自伝』『エドワード・ヤン』『関東大震災の想像力—災害と復興の視覚文化論』『BOND ON BOND 007アルティメイトブック』『ウェス・アンダーソンの世界 ファンタスティックMr.FOX』など。共訳書に『働かない—「怠けもの」と呼ばれた人たち』など。『キネマ旬報』で★取りレビュー連載中。